

卒業論文の要旨

論文題目	外国人児童への日本語支援:段階別に求められる大学生ボランティアの能力とスキル
氏名	崔ナレ
メジャー	コミュニケーション学
現在の日本では、外国人児童の増加に対し、日本語教育指導者の数が不足している。文部科学省(2023 年)によると、日本語指導が必要な外国人児童は 2021 年の 47,619 名から 2023 年には 57,718 名へと約 1 万人増加した。一方、日本語教師の数は 46,257 名であり、その多くが非常勤やボランティアであるため、学校での指導者不足が懸念される。また、高校では 2023 年に「特別の教育課程」が導入されたものの、それ以前は支援が不十分であった。外国人児童の教育の不足を補うため、大学生ボランティアが日本語支援を行っているが、その教育効果や専門性が課題となる。文部科学省の「モデルプログラム」や「豆の木モデル」を参考に、ボランティアに求められる独自の資質やスキルについて検討する必要がある。 本研究は、日本語教育のサービ斯拉ーニング活動(SL 活動)のボランティアとしてフィールドに入った著者が、日本語支援の実践を通じて感じ取った問題を明らかにし、その解決を図る過程で得られた知見をまとめたものである。 現在の日本語教育支援制度は、大学生の実習やボランティアに大きく依存しており、ボランティアなしでは運営が難しい状況にある。しかし、彼らに向けた専用のマニュアルや体系的な教育方針は整備されていない。そこで本研究では、「大学生ボランティアが学習者を支援するうえで必要な専門性を身につけるためのマニュアルの不在」という問題を設定した。また、この研究を通じて、大学生ボランティアが時間の経過とともに身につけるべき能力やスキルを整理し、独自のモデルを提案した。 本研究の結果、SL 活動の各段階において大学生ボランティアに求められる能力として、以下の点が明らかになった。SL 活動支援前には、学習者の属性、学習動機、学習環境に関する情報収集力が求められる。支援中には、学習者の日本語レベルを把握する力、学習者とのコミュニケーション能力、学習課題の解決力が重要となる。そして、支援期間の終盤には、学習者の成長把握、後任への情報伝達、ボランティア自身の日本語支援に対する姿勢の確認が必要である。	
(指導教員の推薦のコメント) 本研究は著者自らが実践した外国人児童支援の日本語ボランティア活動を通し、大学生ボランティアに必要な能力・スキルをサービ斯拉ーニングの開始、実施中、終了前の各段階に分け整理した点が特色である。従来の「豆の木モデル」は具体的実施時期との結び付きを欠くが、本研究は大学生ならではの、専門知識に欠ける一方で子どもに寄り添う存在として、コミュニケーション力を重視する。外国人留学生としての経験に基づく知見は、今後の大学生ボランティア活動の貴重な指針となることが期待される。本研究は、現場での実践経験を通して得た具体的知見を整理し、大学生ボランティアの育成に向けた実践的指針を提示している点で、意義深いものであるとみる。	